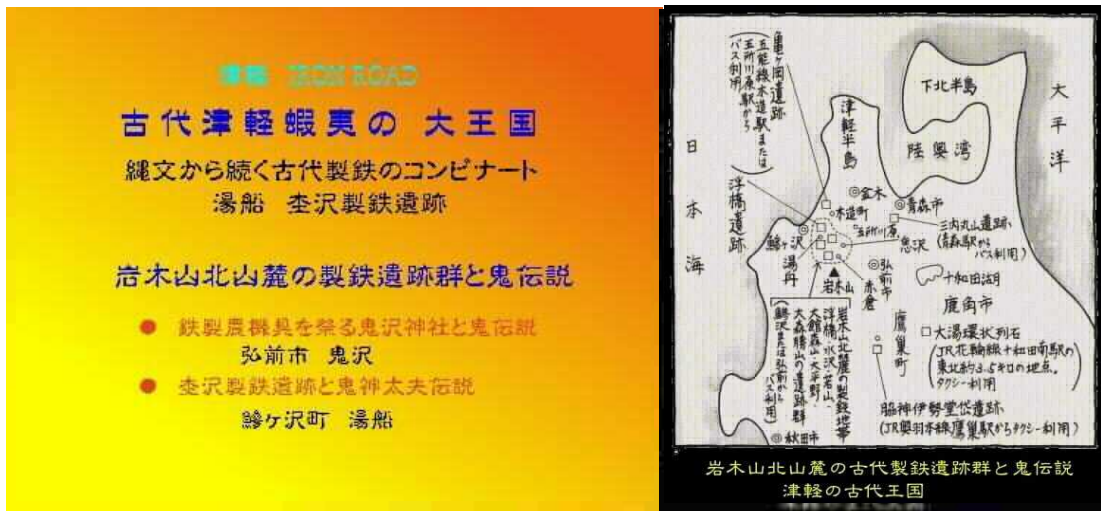


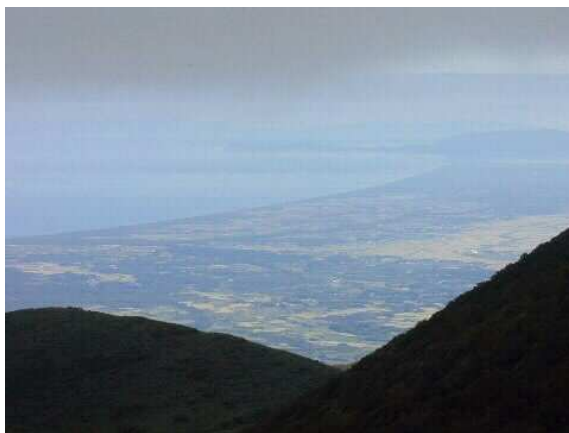
6.

岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説

tgruoni.htm by M.Nakanishi 2000.3.5.



- 6.1. 鬼伝説と古代製鉄
- 6.2. 岩木山北麓 鬼沢 「鬼神社」と「鬼伝説」
- 6.3. 杵沢製鉄遺跡群 鱒ヶ沢町湯舟 と「鬼伝説」
- 6.4. 中世の交易都市 安東氏の拠点 十三湊



【岩木山から津軽半島から北海道を望む】 【北海道側から十三湖・七里長浜・岩木山を望む】

岩木山の頂上から 北を見ると眼下に、点々池・湿地が広がる広大な津軽平野「北のまほろば津軽の王国」が望める。北山麓には鬼伝説をもつ古代一大製鉄基地 鱒ヶ沢から弘前の幾多の沢筋がひろがっている。その向こうには、広々と開けた平野部が広がり、数々の縄文遺跡がある森田村そして五所川原・弘前・青森の市街の東西のベルトが伸び、陸奥湾を望む青森のはずれには、縄文の巨大都市山内丸山縄文遺跡が見える。

その奥の津軽半島に目を転じると日本海にそってまっすぐに北に伸びた砂鉄の浜『七里長浜』が見える。その海岸の湿地帯・池塘群の丘には亀ヶ岡縄文文化と呼ばれる縄文遺跡がちらばり、その奥には中世安東氏の繁栄を支えた貿易港 十三湖・十三湊が見え、竜飛岬を隔てて北海道 かつてのオホーツクの王国の地が見える。

津軽へ初めて行ってくもう 30 数年経つが、何時行っても新しい発見の有る津軽。

原色と太い線で描かれるあの躍動感あふれるねぶた絵とねぶたのリズム 津軽三味線の響き 恐山

のイタコ。そして、地吹雪までも観光資源としてしまう。古代からの津軽王国の歴史が今も続く活力のある地域である。

津軽へ初めて行って もう 30 数年経つが、何時行っても新しい発見の有る津軽。しかし、日本書紀によれば、この津軽の蝦夷と大和朝廷軍とは戦闘を交えたというよりも、和睦によって、大和朝廷の支配下にはいったものであると言われる。

独自の文化をもった勢力圏 津軽王国が弥生時代～中世までずっと独立性を保って存在してきたという。

弥生時代後半から 6,7 世紀にかけて、大陸・朝鮮半島からやって来た渡来人技術集団によって伝来した鉄器・製鉄技法が日本で活発に取り入れられ、製鉄も行われるようになり、それらを手に入れた各地の王国 文化圏が日本統一をめざして覇を競い、その中から大和朝廷・日本が誕生した。

そして日本の大半を統一し、東国毛野・常陸国まで進出してきた大和朝廷は 8～9 世紀初には、東北部蝦夷征伐に乗りだし、大量の鉄製武器が動員された。

既に紹介した福島県原町に存在する製鉄遺跡群はまさに大和朝廷蝦夷征伐の兵器庫として隆盛を極めた大製鉄遺跡である。また、畿内河内の古市台地の製鉄遺跡群をはじめ、京都府丹後半島弥栄町の製鉄遺跡群 吉備・出雲・そして伯耆など中国山脈各地や九頭竜川流域の越の国など日本各地の製鉄遺跡群もこの時代隆盛のひとつのピークを迎える。

大陸からつながってきた『鉄の道・Iron Road』が日本誕生を演出した流れである。

話を津軽に戻すと『鉄の道・Iron Road』は古来早くから、日本海 海路 津軽にもつながっており、日本列島の北の端で大きな独自文化圏を築いてきた。ただ、日本・大和朝廷の敵方勢力圏から外れていた為、北海道と同様 未開の土地と切り捨てられていたにすぎない。

事実 岩木山北山麓が古代の大製鉄地帯であったことが その地帯に伝わる鬼伝説と多くの製鉄遺跡群によって判ってきている。



津軽 鬼の故郷 岩木山と岩木山神社

この製鉄遺跡から発掘される炉の構造が、この時代大和朝廷の支配下にあった製鉄遺跡の炉とは少し異なっており、伝播の道が少し違っていると言われている。また、柴田弘武氏らの本によるとこれら鉄の技術を持った東北の集団がその後の時代に俘囚として、日本各地でたたら製鉄に従事し、たたら製鉄の伝播に大きな役割をはたしたことが示されている。当時 奥州・津軽の製鉄技術の優秀性が大和朝廷でも認められており、完全に津軽を征服しなかったことと合わせるとあまりきっちりとした証拠は発見されていないが、津軽に巨大な鉄の王国があった。証拠であろう。

昨年秋、津軽を訪問し、岩木山に登り、縄文文化の花開いた津軽半島西海岸を歩き、鉄の痕跡を探した時にはその痕跡は見つけられなかった。しかし、山内丸山遺跡・亀ヶ岡縄文文化のスケールにふれ、また、「ねぶた」のあの山車の迫力、そして 現代の青森の明るさとエネルギーに圧倒され、ここにも古

代日本誕生にかかわった「Iron Road」が伸びていると想像していた。

岩木山の北麓一体が古代の大製鉄遺跡群であり、また、製鉄と関係深い「鬼伝説」の伝わる土地であることを知ったのはつい最近であり、いつも津軽王国の存在を意識していたものの、製鉄遺跡の存在を知り、また、じっくりと岩木山麓を歩いたことと合わせ、やっと津軽 鉄の王国『津軽鉄の道・Iron Road』の存在が実感として結びついた。

雪が消え、暖かい花の季節には、是非 この岩木山北麓に広がる古代製鉄の地を訪ねたい。



岩木山から岩木山北麓にかけての一带では、多くの鬼伝説が伝承されており、同時に古代の大製鉄遺跡群や鉄滓が数多く発見されている。鬼伝説と古代製鉄遺跡との関わり合いは日本各地で見られ、鬼伝説の有る所 かならずや古代製鉄と何らかのつながりがあったことが、製鉄遺跡や鉄滓の発掘や地名等から判って来た。吉備の桃太郎伝説 丹後の大江山鬼伝説 伯耆の国大山山麓溝口の鬼伝説 北上山地地・一関の鬼伝説 そして津軽岩木山北山麓の鬼伝説などいずれも古代製鉄の技術を持って渡来した産鉄の民との関わりが深い。

この伝説に登場する「鬼」とはいったい誰か？。

製鉄の民が真っ赤な顔をして、髪を振り乱しながら鉄を打っている様子が鬼と映ったのかもしれない。製鉄には鉄を精錬するための炉の場所として、風が吹きあがる谷間や山すそが必須であり、大量の炭の必要から森林の伐採が必要で、製鉄炉が築かれると山が丸裸になってしまう。鉄生産に付随した森林の大量伐採と 砂鉄・鉄鉱石採取のための山を切り崩しと川流し等による山の荒廃により起こる自然災害により、農耕の民との争いもたえなかったと想像される。山深く入った産鉄の民は山と里人との争いを通して 山の民=「鬼」 悪者として描かれるこ

とが多い。しかし、時には里に下りてきたこの産鉄の民が開墾を促進し「開拓の祖」と善者にもなった。これらが鬼伝説として、また 地名として今に伝えられている。

一昨年 大ヒットした映画「もののけ姫」の記憶は新しい。

また、各地に残る大男「ダイダラボッチ・ダイダラ坊」の伝説や「河童」伝説も産鉄の民・渡来人との関わりがあるとの説があるが、よく判らない。

## 6.2. 岩木山北麓 鬼沢「鬼神社」と「鬼伝説」 弘前市 鬼沢



鬼神社 社殿 多数の農耕具献額を掲げた鬼神社正面 農耕具の献額

弘前市から岩木山を左手に見ながら鱒ヶ沢町に向かう県道を行くと「鬼沢」という地名が見えてきます。この集落には、「鬼神社」があり、鬼が御神体として祀られ、農業の守護神として地域の人々の信仰を集めています。この地の鬼神社には、『山から下りてきた鬼が、一夜にして荒地に一大水路を作り上げ、農耕の民の開墾を助けた』との鬼伝説が伝わっています。2月の節分、この地域の人たちは今も「鬼は内、福は内」と言い、鬼を悪者ではなく、自分達の守護神として祭っている。

鬼神社のご神体は鉄滓を数個積上げたもので、古くから石の仏様として大事に祭られてきたという。

また、神社拝殿正面の頭上には奉納額が並んでいるが、それら全部が全部、農耕具だというのが非常におもしろい。

このように鬼沢神社はこの地が古くからの製鉄地帯である事を含め、鉄との関わりが非常に深く、これがまた、『鬼伝説』とも結びついている。

岩木山にいた沢山の鬼たちが山麓に流れ出る赤倉川の流域に移り住み、この鬼沢の鬼もこの赤沢の鬼が下りてきたといわれている。岩木山から赤倉に下って行く途中には 今も「鬼の土俵」などの地名が残っている。

赤倉の山にいた製鉄の民が真っ赤な顔をして、髪を振り乱しながら鉄を打ち、農具を作っている様子が、村人には鬼と映ったのかもしれない。

### 津軽 岩木山麓 鬼沢に伝わる「鬼伝説」

青森県 弘前市 鬼沢

昔々このあたりはやせた荒地で、作物の実はきわめて悪かった。そこへ、岩木山の赤倉から下りてきたという鬼が現れ、せつせとこの荒地を耕し始めた。村人達は、これを見て、ただの鬼ではないと思いい、開墾の困難と農業用水の必要を鬼に訴えた。

すると鬼は、それでは力を貸そうと言ったきり、姿を消してしまった。翌朝になって村人たちが行ってみると荒地には、一筋の水の流れが勢いよくほとばしっているではないか。

村人たちは、さっそくその水を田に引き、以後、その水は干ばつの時も決して枯れることはなかったという。

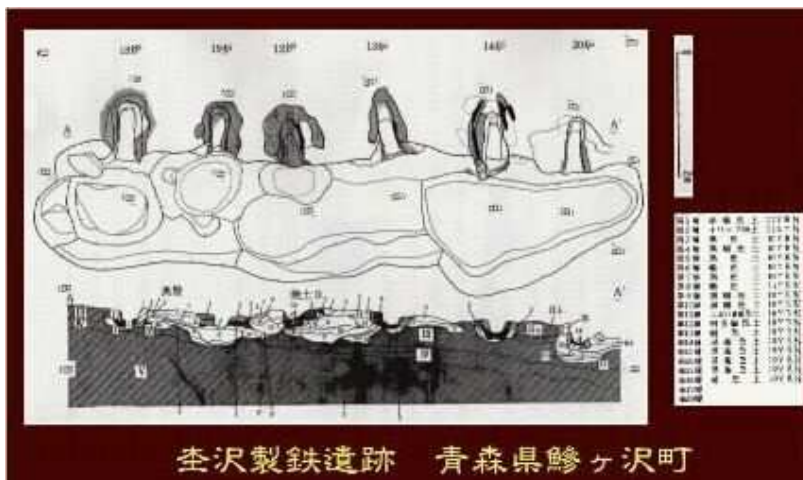
村人たちは、非常に喜んで、鬼に感謝するため、神社を建立して「鬼神社」と名づけ、村の名前も「鬼沢」としたという

## 6.3. 空沢製鉄遺跡群 鱒ヶ沢町湯舟 と「鬼伝説」



青森県鱒ヶ沢町から南に広がる岩木山北山麓の一帯は鬼神伝説を持つ古代から続く一大製鉄地帯の中に、鱒ヶ沢湯舟で発見された空沢製鉄遺跡がある。

数基単位で整然と並んだ製鉄炉跡 134 基とともに鉄滓・羽口や炭焼がまなどが発見された。



鱒ヶ沢町湯舟空沢の製鉄炉のきりとり作業（鱒ヶ沢町中央公民館提供）

【青森県鱒ヶ沢町 教育委員会 資料より】

傾斜地の斜面に長さ 1m 前後 幅 50cm 弱 高さ 30cm 程度の製鉄炉が数基ずつ整然と並び、その前にそれらの前庭部には共用される廃滓ピットと作業場がある。

このような一連の製鉄炉をもつ製鉄場が 9 群 total 30 数基の製鉄炉などが発掘されている。

大半が、10 世紀平安時代の製鉄炉遺跡であるが、このような小型の製鉄炉が整然と並ぶ製鉄場を基本とする製鉄遺跡は、同時代日本中央に見られる製鉄遺跡にはない独自の形式を有する遺跡である。

また この一帯は縄文時代から続く製鉄地帯であり、数々の縄文遺跡もあり、本遺跡も古い製鉄遺跡の上に築かれていることから、この地での製鉄はもっと時代を遡れるといわれている。

このように独自の形式を持つ製鉄遺跡が発見されたことからこの地が古くからの津軽蝦夷の王国を支えた一大製鉄基地と考えられる。

## 湯舟の鬼神太夫伝説

鱒ヶ沢町



湯舟 中央の杉木立の上にお宮がある

湯舟 湯舟神社

昔 鬼神太夫(鬼)と呼ぶ剛力の刀鍛冶がいました。桂山の刀鍛冶長者の娘を愛して、娘をくれるようにと申し込んだ。困った長者は一策を案じ、一晩の内に拾腰(本)の刀を鍛えたら娘をやると約束した。

すると、鬼神太夫は一晩の内に、全部刀を鍛えて持ってきたが、長者が一本盗んで鳴沢川に捨ててしまった。

それで、鬼太夫は刀が一本足りず、娘を貰えずあきらめて、「十腰無い十腰無い」とつぶやきながら、さびしく去っていった。

それで、それ以後この地を「十腰無い」がなまって「十腰内」というようになった。

その後、鬼長者の妹娘と結婚した鬼神太夫の弟が、ある日のこと 鍛冶場の片隅に残っていた玉鋼を見つけ、刀鍛冶の兄が打ったものであると打ち明け、その玉鋼を氏神として八幡様に祭った。

長者が亡くなる時姉娘には 形見として 湯舟(鉄を冷やす水を入れた船)をやり、分家させた。

また、妹娘には金敷(鉄を打つ台)をくれた。それが湯舟村 金敷村の起こりとなった。

また、長者が刀を捨てた刀が浮いた所を「浮太刀」と言うようになった。今の「浮田」である。

なお、鬼神太夫の打った刀の一本が今も岩木山 巖鬼神社に祭られているという。

「ふるさと あじがさわ」より

## 空沢製鉄遺跡の特徴

中央と違う炉の型 高い生産力をしめす

平安時代の製鉄コンビナートが八日までに岩木山ろく、西津軽郡鰐ヶ沢町湯舟の空沢（もくさわ）遺跡で見つかった。付近には製鉄・鍛冶（かじ）の遺構のほか、鉄にちなんだ伝説、地名が多い。今回の発見は、岩木山ろく一帯が当時、「蝦夷（えみし）の地」だったとされる東北北部の鉄生産の「拠点」の一つで、北日本の鉄製品の供給源だった可能性を強く示している。

発掘調査に当たった歴史文化財調査センターによると、製鉄炉、木炭窯、鍛冶場、住居、それに丹戸の跡といった「製鉄工場」と工人たちの生活の場がまとまって出土したのは、県内では初めて。二十三基前後の炉跡はコンクリートの斜面の土を掘り出してつくられていた。

今回発掘された製鉄工場遺跡の範囲は、東西約三十メートル、南北約百二十メートル。南側に製鉄炉群が六列並び、さらに燃料を生産する木炭窯跡が三基あった。北側には、十九棟の住居と三基の鍛冶場を配置。製鉄炉群の斜面の上方には相い構、住居部分の南方には幅三メートルの大きな溝が走っていた。相い溝は製鉄炉への水の侵入を防ぐためのもの、大きい溝は防衛用だった可能性があると、としている。

多い製鉄や鍛冶の遺構

一地名も伝説も鉄づくめ——岩木山ろく一帯

製鉄史の研究をしている「たたら研究会」（本部・広島大学）の穴沢義功委員によると、古代の製鉄炉の数はこれまで岡山県内の遺跡（古墳時代）の五十九基が最高。製鉄技術が普及発展した奈良・平安時代では本沢遺跡が最多になる、という。しかも、同遺跡では、古いものを壊した上に新しい炉を築いており、相当の長期間、鉄を生産していた、とみられる。

岩木山ろくには製鉄遺跡が多い。本沢遺跡の南約四キロの鰐ヶ沢町・大平野遺跡と大角森山遺跡からは平安時代の製鉄炉跡がそれぞれ、三、四基出土。山ろく周辺の森田村や五所川原市では、鉄を加工する鍛冶場が多数見つかった。

しかも、山ろくは砂鉄の産地。鰐ヶ沢町の郷土史家、坂井冬樹さんによると、二十年ほど前まで、赤ん坊の頭大の金葉（かなくそ）製鉄したあとのクズ）が山中にゴロゴロころがっていた。鉄が不足した鉄時中は、本沢遺跡近くの鴨沢駅から貨車で搬出するほどだった、という。

鰐ヶ沢町内には、鉄にちなんだ地名が多い。同遺跡がある地区の地名「湯舟」は「熱した鉄を冷やす舟の入った舟」。隣接地区の「小原敷」は「金敷」（鉄を打つ台）が転じた、とされる。刀鍛冶の若者を取り上げた伝説「鬼神太夫」。遺跡近くの神社のご神体は、巨大な鉄の塊……と鉄づくめの地だ。

平安時代、坂上田村原氏が蝦夷を征討し中央政府の勢力圏は次第に北上したが、東北北部は蝦夷せず蝦夷の反乱や、陸奥の豪族・安倍氏と中央から派遣された東國の武士団の衝突（前九年の役）など戦乱が相次いだ。岩木山ろく一帯の「製鉄コンビナート」が、武器や農具に使われた鉄の、北日本における供給源だった可能性が高い。

空沢遺跡 製鉄炉跡調査報告

青森県 鰐ヶ沢町 教育委員会送付資料

鰐ヶ沢 鬼伝説資料

青森県 鰐ヶ沢町 教育委員会送付資料

「謎解き日本古代史の歩き方」

彩流社

柴田弘武著 「鉄と俘囚の古代史」 彩流社

## 6.4. 中世 津軽安東氏の拠点 十三湊

—活発な国内各地・大阪との交易 & 鉄の積出—  
[jyusanprint.htm](http://jyusanprint.htm) by M.Nakanishi 2000. 2. 22.

十三湊は十三湖と日本海にはさまれた砂州上に発達した港町。鎌倉時代には既に港町が存在し、室町時代には安東氏の居所としても大いに栄えた。

「津軽船」と呼ばれる船便で中央と結ばれる一方、当時の最北端の港として、北の世界とつながるターミナルとしての役割をはたし、中国との交易をはじめ、国内外の物産がこの地に集まった。

輸入陶器や安東氏の館跡や町屋などが発掘されている。

縄文時代の一大文化圏として脚光を浴びた津軽がその後大和朝廷の支



配下に入ったものの遠く未開の土地として、歴史の世界からは消えてしまう。

大和朝廷の影響の及ばない中で、独立の勢力として文化を育ててきたとおもわれる。そして、中世 安東氏の日本海交易による繁栄により、世界の物産が集まる大交易港湊町として脚光をあびた。

またこの時代 鉄の積み出し港としても栄え、津軽岩木山周辺の古代製鉄の流れが連続と引き継がれ、この時代においても 津軽が製鉄の大基地であり、安東氏の勢力もこの鉄の生産によるとも言われている。

私が昨年の秋、再度 十三湊を訪れたときには、台風の嵐の中。

荒れ狂う日本海に抗して砂州がひろがり、その内海・十三湖 十三湊では数多くの船が嵐のおさまるのを待っていた。天然の良港である。

日本海の荒波と風が吹きすさぶ北の端にあって、十三湊の繁栄の理由が判ったような気がした。

もっとも、十三湊はその後の大地震と日本海が吹き寄せ体積する砂によって 浅くなり また放棄され、現在ではひっそりとした津軽の一漁 港となっている。

本年 1 月 千葉県松戸市の博物館で催された『日本列島発掘'99』展で昨年 発掘調査された十三湊旧跡から出土した数々の物産を見た。中国の磁器はじめ、日本各地の品物が広くこの北の端の十三湊に集められ、また各地に散って行く。出土品の多用さと豪華さから、当時の十三湊の繁栄振りがよく判かる。



十三湊遺跡より  
発掘された公益品の数々



「発掘された日本列島展」より 松戸博物館

## 6. 古代津軽 北の鉄の大王国【1】

岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説

【完】